HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学級で研究しようとする人のための心理学研究法入門 : 研究デザインの視点とデータ収集上の注意
Author(s)	岡, 隆; 仲, 真紀子; 平井, 洋子
Citation	教育心理学年報, 49, 41
Issue Date	2010-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44505
Rights	日本教育心理学会; 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである
Type	article
File Information	naka-164.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Japanese Association of Educational Psychology

The Annual Report of Educational Psychology in Japan
2010, Vol. 49, 41-44

研究委員会企画チュートリアルセミナー

学級で研究しようとする人のための心理学研究法入門
― 研究デザインの視点とデータ収集上の注意 ―

企画者・講演者　岡　隆（日本大学文理学部）
仲　真紀子（北海道大学大学院文学研究科）
企画者・司会者　平井洋子（首都大学東京都市教養学部）

企画の概要

1．趣旨

心理学研究法は，実験的なアプローチを取る人だけでなく，記述的なアプローチや統計的なアプローチを取る人にとっても役に立つ重要な知識である。なぜなら心理学研究法は，研究においてどのような変数を設定すべきか，どのような場面やタイミング，方法でデータ（質的情報も含む）を得るかなど，研究を予めデザインする視点と枠組みを提供してくれるからである。そのような視点は，質的研究・量的研究を問わず，研究の質を高めてくれるであろう。

教育心理学の諸領域において，学級で観察や調査，実践が行われることは多い。そうした研究状況を心理学研究法の視点から眺めると，どのような研究デザイン上の弱点や注意点が浮かんでくるのであろうか。本チュートリアルでは，これらの点について，具体的な例を交えながら入門的な解説を行いたい。

2．想定する対象者

学級を研究フィールドとして，量的データや質的データを収集しようとしている研究者や教員。横断的研究か縦断的研究かは問わない。教室でどのようなデータの取り方をすると自分の考えを実証的に検討でき，どのようなデータの取り方をするとそれができないのかについて知りたいと考えている人。

3．セミナーの構成

第1部：基礎知識編

より妥当な因果推論を行うために知っておきたい事項を中心に，基礎的な知識を整理する。

第2部：応用編

研究をデザインする過程を中心に，具体的な研究場面への適用について紹介する。

第1部：基礎知識編

岡　隆

心理学的研究は，その一つひとつが具体的な実践である。第1部では，その実践を可能にするために必要な基礎的知識を，高野・岡（2004）と岡（2006b）に基づいて，特に実験的なアプローチを想定しながら解説する。

1．手続き化，補助仮説

多くの研究はリサーチ・クェスチョンを発することから始まるが，心理学的研究のリサーチ・クェスチョンの多くは，2つ以上の変数間の関係に関するものである。2つ以上の，しかし少数の変数間の関係――因果関係にせよ相関関係にせよ――が明確に述べられたものを，研究仮説という。

研究仮説に含まれる変数は，おおよそ抽象的で概念的なものである。この変数について，何らかの事実を同定するための実証的な研究を行うときには，この抽象的な変数を具体的な手続きに対応させなければならない。この対応づけを手続き化ないしは操作化といい，このようにして概念的な変数と具体的手続きの対応づけが明確に述べられたものを，補助仮説という。多くの研究者に採用される標準的な手続き化が用意されている――補助仮説が比較的確立している――研究領域もあるが，そうでない研究領域では，個々の研究者がその手続き化に創意工夫を凝らさなければならない。

一つの実証的研究には，このように最少でも3つの仮説――研究仮説と，2つの変数それぞれの補助仮説――が含まれることになる。実証的研究のデータが研究仮説を支持するときには，研究仮説が正しかったと，とりあえず結論することができるが，それが研究仮説を支持しないときには，研究仮説が正しくなかったとは結論できない。補助仮説のいずれか，あるいは両方が適切でなかったという可能性があるからである。実証的研究のこのような性質のために，補助仮説が確立していない研究領域――心理学的研究では多くの領域がそうであるが――では，「不存在の実証」や「反証」は極めて困難である。

2．純化，多重意味と多重手続き化

概念的な変数と具体的な手続きは，1対1ではなく，多対多に対応している。1つの概念的変数はいくつもの具体的手続きに翻訳することができるし，逆に，1つの具体的手続きはいくつもの概念的変数の代表でありうる。この後者を，「手続きの多重意味」という。このような事

NII-Electronic Library Service